

まひの病床、涙のサイン 武蔵野の天畠さん、意思疎通の研究者に



「あ・か・さ・た・な話法」でコミュニケーションをとる天畠大輔さん＝東京都千代田区、山口明夏撮影

ひとりでは動くことも話すこともできない重度障害のある男性が、台湾に出かける。意思疎通をはかるには通訳者を必要とする障害者についての調査の一環で、同じような障害のある女性を訪ねるためだ。母親が編み出したコミュニケーション方法で1文字、1文字を紡ぎ出し、2年後の博士論文の完成を目指す。

東京都武蔵野市の天畠大輔さん(31)。立命館大学大学院先端総合学術研究科(京都市)の博士課程に在籍している。

聴覚はあるが、四肢がまひし、言葉を発することができない。視覚は色や立体をある程度確認できるものの、文字は読めない。時々あごがはずれ、放っておくと息ができなくなる。生きていくには24時間の介助が必要で、意思を伝えるためには通訳が欠かせない。

天畠さんが障害を負ったのは14歳のとき。急性糖尿病で心肺停止状態になった。医師は「植物状態で知能も幼児レベルに低下した」と告げた。だが、約半年後。ベッドに横たわる天畠さんの目から涙がこぼれているのを見た母の万貴子さん(60)が「何かを伝えようとしている」と感じた。

「大輔、五十音を言うから何かサインをして」。万貴子さんが「あ・か・さ・た・な……」と語りかけると、何度目かの「は」の音のとき、天畠さんの舌の先がわずかに動いた。

「は行ね。は・ひ・ふ・へ・ほ」。母の声に導かれるように、天畠さんは再び「へ」で反応した。1時間以上かけて2人が紡ぎ出した言葉は「へ・つ・た」。

万貴子さんはベッド脇の経管栄養の袋が空になっていたことに気づいた。「おなかが減ったの?」。天畠さんの意思が初めて他の人に伝わった瞬間だった。

■仲間が論文協力

この「あ・か・さ・た・な話法」でコミュニケーションをとるようになった天畠さん。養護学校を卒業後、ボランティアの大学生らに家庭教師になってもらい、受験科目の少ない大学に的を絞って英語を猛勉強した。大学側とも試験時間の延長や通訳者の同行などを交渉し、2004年、ルーテル学院大(東京都)に2年がかりで合格した。

大学には学生ら約40人の協力を得て授業のノート取りや食事、トイレなどの介助を受けながら車椅子で通学。卒論を完成させ、10年に立命館大大学院に進んだ。研究テーマは障害者のコミュニケーション法だ。

大学院に通うのは年に1、2回だが、授業は無料のインターネット電話で受け、指導教官が学会などで上京する時に直接面会する。去年は「あ・か・さ・た・な話法」をめぐる現状と課題について、修士論文にあたる博士予備論文を完成させた。関係者にインタビューし、文献は読み上げてもらって記憶、通訳者と1文字1文字を確認しあって164ページ、16万字に及ぶ論文を書き上げた。

■台湾へ調査の旅

調査・研究内容を理解して通訳し、論文作成を介助するには通訳者にかなりの知識が求められる。大学院生や修士号取得者ら6人がチームを組み、博士論文にも取り組む。天畠さんは通訳を通じ、「自分の研究を意思疎通ができずに困っている障害者の環境整備に役立てたい」と話す。

台湾では、幼少時に火事で煙に巻き込まれて高次脳機能障害を負い、動くことも話すこともできなくなった女性と面会、コミュニケーション法や生活環境について話を聞く予定だ。

出発は21日。4日間の滞在期間中も介助者が24時間体制で天畠さんをサポートするという。

(編集委員・大久保真紀)